

第7回「ネット依存とメディア・リテラシー」

2007年6月5日

毎日新聞経済部記者 竹川正記

(1) なぜネット連載企画「ネット君臨」を始めたか

・メールや検索、オンラインショッピングなどインターネットの登場で我々の生活は便利になった半面、いじめも含めた誹謗中傷の被害や犯罪の増加、検索に頼りすぎて自分の頭でものを考えなくなる（コピー&ペースト文化）などの矛盾も広がっているのではないかとこの素朴な疑問が発端。

・「ウェブ2・0」や「ウェブ進化論」という言葉に代表されるようにネット礼賛論が流行する中で、あえてその矛盾に光を当てて、その問題点を探ることがネット社会をよりよくしていくことになるのではないかとこの考えから連載を進めている。

・第一部「失われていくもの」（07年元旦～1月10日、9回連載）では利用者の現場から報告。2chでの匿名による誹謗中傷問題やネットで世界に拡散する児童ポルノ被害、ネット依存が子供の学習や心に与える影響などを取り上げた。

・第二部「IT立国の底流」（同3月21日～30日、7回連載）では官民あがてのネット推進策もたらしたものをテーマにその矛盾や課題を追った。具体的には、インフラ整備に偏った国のIT戦略本部の政策の矛盾や、官僚主義に阻まれて動かない電子政府、ネット技術の急速な進展に利用者保護が追いつかない法制度の問題などをレポートした。

・今月4日から始まった「第三部～近未来の風景～」(12回連載予定)では、日本に近い米中韓のネット社会のルポを日本の近未来の姿ととらえながら、我々がネットをより良く使うための課題を探ることを目指している。初回は米バーモント州でネットいじめが原因で自殺した少年の事件をきっかけに、米国で広がるcyberbullying防止への動きをルポ。2回目はネットの有害情報が青少年の性犯罪増加を招くなど深刻な悪影響が出ている韓国の現状を描いた。今後はネットでの誹謗中傷問題と表現の自由の価値観との相克で悩む米国の様子や、中国のネット規制と民主化の行方、ネットと世論、メディアの関係などを各国から報告する予定にしている。

(2) 連載への反響

・従来のように政治家や芸能人ら有名人だけでなく、個人も2ch掲示板やSNSなどで激しい誹謗中傷を受ける時代になっており、読者からの反響は大きかった。また、ネット上の専用ブログにも多くの書き込みが寄せられた。

・「衰退する新聞がことさらにネット否定論を展開している」との非難も受けたが、ネット社会の今後のあり方について議論を深めるきっかけを提供できたと考えている。

・ネットが従来のサイバースペースにとどまらず、政治や経済、生活の重要なインフラとなりつつあることを考えると、現実社会とのあつれきはますます強まっていくと考えられる。その際、ネットの自由さや便利さを生かしつつ、どういう現実社会と調和させていくのか、ジャーナリズムにとっても取り組むべき大きな課題だと考える。

(3) 取材で気づいたこと

・ネットは我々に容易にほとんど無料で情報を与えてくれるが、その中身は玉石混交。あるIT経営者は「ネットは永遠のベータ版」と評したが、そのことをきちんと理解して使う能力がユーザーに求められている。

・CGM時代の危うさ。個人が携帯やデジカメで画像や動画を取って簡単にユーチューブなどにアップできる時代は埋もれたタレント（才能）の発掘など良い面がある半面、特定個人を攻撃したり、いじめたりするための残酷な武器となりうる恐さを抱える。

・ネットにあふれる情報の真偽や質をきちんと評価して使うとともに、情報発信するときには現実社会と同様に他人への配慮をきちんと考えるリテラシーを養う重要性。

(4) その他

・毎日新聞の読者サイト「まいまいクラブ」(<https://my-mai.mainichi.co.jp/mymai/>)内に元旦の連載開始と同時にネット君臨取材班専用ブログを開設。読者やネット視聴者との議論を図っている。

・ネットの発展で一般産業とメディアの垣根がなくなりつつあることをどう考えるか。例えば、マードック氏率いるニューズグループにWSJに対する買収提案。マードック氏はWSJの買収に成功すれば、英FTにも買収提案を仕掛けるとも噂されており、そうなればビジネスとしては世界最強の経済メディアができる半面、ジャーナリズムとしてはメディアの寡占による言論の多様性の喪失や、編集の独立性・中立性の面で懸念が生じる。